



Key
Person

(株)翔城 代表取締役

松山 成昭

自然と周囲に人が集まってくる。

左官工事会社『翔城』の松山社長との対談からはそんな印象を受けた。

かつては挫折も経験し、一から立ち上がってきた経験を持つ社長。

「失敗ばかりの人生でしたが、だからこそ学び気づけたこともあります」と前を向く。

現在は人一倍、人とのつながりを大切にしたい経営を続け、

心から信頼できる多くの仲間にもまれて、仕事に打ち込む日々だ。

そんな社長が目指すのは、仲間たちによるグループ企業の展開。

自分だけでなく、周囲の皆が笑顔になれる——そんな日常を目指して社長は歩み続ける。

「苦しい時に仲間が支えてくれた。

そんな皆とこれからも歩んでいきたい」

繋



仲間と優れた左官工事を徹底し 着実に前進を続けていく

代表取締役 松山 成昭



Interview

ゲスト つまみ枝豆

福岡県北九州市出身。中学を卒業後、厩務員を経ておじの会社で左官の修業をスタートした。23歳で独立するも、あえなく閉鎖し、30歳で拠点を神奈川に移す。神奈川の左官工事会社に勤めながら、人脈を広げて40歳で再度起業。『翔城』を設立し、2021年で5期目を迎える。グループ企業も意欲的に展開中。



株式会社 翔城

神奈川県横浜市西区浅間町 3-176-7 コスモ 5 801



「対談中、これまで出会った方々への感謝の思いを何度も述べる松山社長の姿が印象的でした。神奈川で独立した際も、勤務先の社長と話し合い、納得してもらった上で起業を果たされたのだとか。「勤務先の社長には今でも感謝の念が尽きません」と社長。これからは一つひとつの出会いを大切に歩んでいって下さいね」 つまみ枝豆・談

左官工事を軸に据える『翔城』。繊細な職人技が要求される業界で、10代から直向きに腕を磨いてきたのが松山社長だ。左官業の歴史は日本家屋の歴史といっても過言ではない伝統のある仕事だが、松山社長は今の時代に合った柔軟な対応による人材育成に力を入れている。本日はそんな社長のもとを、つまみ枝豆氏が訪問。社長にインタビューを行い、事業に懸ける思いを伺った。

左官職人として独立するも
若さゆえに困難と挫折を経験

——『翔城』さんでは左官工事を手掛けておられると伺いました。松山社長は長く左官業界を歩んでこられたのですか。

10代半ばから左官業界で腕を磨いてきました。元々、おじが左官業を営んでいて、私も中学生のころから時々アルバイトをさせてもらっていたんです。当時から職人に憧れがありましたから、おじの会社で修業を始めました。

——左官はまさに伝統技術というイメージがありますし、修業はかなり厳しかったのでは？

厳しかったですね。完全な縦社会で親方や先輩の言葉は絶対です。理不尽なことを言われても、全ては早く一人前になって独立するためだと耐え抜きました。そして7年間修業を積み、23歳の時に一度目の独立を果たしました。

——一度目の独立ということは、今は二度目に当たるのでしょうか。

ええ。幸いなことに順調に仕事をいただけて収入も増えましたが、若かったこともあってその状況に天狗になってしまっていて……。経営経験がない中で経理面の甘さがあったことに加え、当時は若い衆を使っていたんですが、人を束ねる力が未熟で相手の気持ちを汲み取ることができなかったんです。それで気がつけば周囲の人々は去ってしまっており、私一人きりで事業は閉鎖。本当にどん底を味わいました。

——それは……さぞ悔しかったですよ。

多くの仲間を得て再度起業
失敗も糧に事業を成長させていく

——そこからどのようにして再び立ち上がられたのですか。

知人が横浜市の左官会社の経営者と知り合いで、「話をつけてやるから、横浜で心機一転頑張ってみないか？」と声を掛けてくれたんです。それをきっかけに、それまでの自分を変えようと地元・福岡から神奈川に出てきました。そして紹介してもらった会社に勤めながら左官の仕事に従事。勤務先は私が神奈川に来たころに始動した会社だったので、その成長過程を見ながら経営面など様々なことを学ばせていただき、再度独立しました。

——いい時期にこちらに来られたわけだ。

それに単身で神奈川に来た当初は全く知り合いがいない状況だったんですが、仕事を通じて多くの同業者と知り合うことができたことは、私の大きな財産になっています。勤務時代の10年間に現場で知り合った仲間たちが徐々に増えていきまして、彼らは独立した今もそばで私を助けてくれているんですよ。たとえば、今『翔城グループ』として独立している『上翔』という会社があるんですが、そのトップとして組織を束ねてくれているのも、その当時知り合った仲間の一人です。彼は元々一人親方として仕事を続けていたんですが、私のもとに入ってくれました。こういう形でどんどんグループを展開していければ嬉しいですね。

——一度独立された方が別の方の傘下に入るの、なかなかないことだと思います。それだけ社長のお人柄が魅力的だったのでしょうか。

いえいえ。私はこれまで失敗ばかりしてきましたよ（苦笑）。ですが、その失

敗から学んだことも多かったです。そして学び取ったことを活かしながら努力を続けた結果、元請会社様からも信頼をいただけるようになり、自分に自信を持てるようになりました。また社員に対しても「自分のやりたいことができる環境があるよ」と胸を張って言えます。お陰様で今は18歳から26歳までの若い職人たちが10人ほど在籍しており、皆頑張ってくれていますよ。

——今は人材不足を嘆く企業が多いですが、御社には若い職人さんがたくさん揃っておられるのですか。

本当にありがたいことです。私は、ベテランが小難しいことを言うから、若い子がこの仕事をやりたがらないのだと思うんですよ。「伝統技術」だ何だと言われると誰でもうんざりしますよね。「若手がない」と嘆く暇があるなら自分たちが率先して若い世代を集め、育てればいい。今は私よりも若い世代が育っていないのが現状ですが、ベテランが育てることを怠ってきたことも原因の一つだと思います。ですから今、当社では若手の育成に力を入れており、今の時代に合った接し方で彼らを指導するように心がけています。

——そうした柔軟な対応が、企業の明暗を分けるのでしょうか。お話は尽きませんが、今後はどのような展望を描いておられますか。

事務所を大きくし、皆が集まれる空間をつくりたいですね。また、事業においては「背伸びをしない」こと。身の丈にあった経営を続けながら、着実なステップアップを目指していきます。

——陰ながらではありますが、私も応援していますよ！

(取材／2020年11月)

Column

対談には、グループ企業である『上翔』の三上社長と、『翔城』で工事部・営業部の統括取締役を務める二宮氏にもご同席いただいた。その際、松山社長の印象について伺うと、「自分だけ良ければいいという考えを持たず、皆と一緒に良くなりたい、何かあった時には自分が全責任を取る覚悟を持つ、そんな松山社長の心意気に惹かれました」と三上社長。

また二宮取締役は10代のころに松山社長と出会ったそうで、その後、20年ほど別会社で働く中で10数年ぶりに社長に再会。その人柄にどんどん魅了されて『翔城』に移ってきた。三上社長も二宮取締役も「社長の人柄に惚れ込んだ」という点は同じ。それほど周囲に人が集まるのは、松山社長自身が誰よりも“人”を大切にしながら歩んでいるという何よりの証拠と言えるだろう。